教員
インタビュー

京都大学公共政策大学院

武藤 浩 特別教授

―先生は京都大学のOBと伺いました。

ええ、そうです。40年ぶりぐらいにこちらに戻ってこられました。

教授として戻ってくるとは、思いもしなかったけれども（笑）。法学部で、ゼミは高坂正堯先生という素敵な先生の国際政治学を選びました。

当時、高坂ゼミは九期で、12、3人しかいませんでしたが、その後、30人ぐらいの規模の人気ゼミになりました。

社会人になってからも先生とは連絡を取っていて、研究室へ行ったり、下鴨にあるお宅にお邪魔したりしていました。

高坂先生の研究室は最初は、法経北館にあって、先生の研究室ではウイスキーを少し飲んで雑談したり、楽しい思い出があります。その後、法経本館に研究室を移されて、そちらにもお邪魔したことがあります。

しかしながら62歳で亡くなられて、本当に残念でした。

お葬式には何とか行くことができて、「ありがとうございました。」とお別れをしたのを今でも強く覚えています。

そういう意味でも、今度、先生と同じように大学で講義を持てるということは大変ありがたい話でした。

―どのような学生時代を過ごされたか教えてください。

学生時代は、大学には、みんな殆ど行かない時代だったから、下宿で友達と語り合ったり、そこで教えてもらった本はたくさん読みましたね。

今から思うと、もったいないことしたなあ、と思います。著名な先生の立派な講義がいっぱいあって、少しでも真面目に聞いておけばよかったですね。

―久しぶりに戻られた京大の雰囲気は当時と比べてどうでしょうか。

学生が真面目になりましたね。前期の私の授業もずいぶん履修登録してくれて、最後まで全然減らないで、真面目に聞いてくれることをびっくりしました。教える側としては、すごく嬉しい。

私の時代はまだ、学生運動が残っていたころで、「全学ストやるぞ。」とか言って、授業が無くなっても、元々あんまり大学に行ってないから、「まぁいっか。」みたいな感じでした。

―百万遍周辺の街並みや、大学の環境はどうでしょう？変わりましたか？

百万遍の雰囲気は昔のままです

ね。お店は変わっているけれども街並みは変わっていない。大学構内も落ち着いていて、京大らしさが残っていますね。時計台はきれいになった。

時計台の後ろには、当時は大きな1番教室があって、普段は授業には使わないで、有名な先生が特別公演をする時だけ使う。そういう時には真面目に聴きに行ったのを思い出します。桑原武夫先生とか、京極純一先生などですね。

—ご卒業されてから、当時の運輸省に進まれたきっかけはありますか？

国際政治をやっていれば、外務省か、防衛庁へ就職を考えるのが、普通かもしれません。しかし外務省だと人生半分ぐらい海外になると思ってしまったのと、国防よりも、一般の経済や産業に関わっていきたいという思いがあったので、採用してくれた運輸省へ就職しました。

当時の国家公務員は、就職先としては人気があり周りも褒めてくれた。自分たちが国を支えてるという意識の高さがありました。今から思うと過剰だったなと思うこともありますけどね。

私の授業でも、日本のためになる、世の中を良くする仕事をする、そういう気持ちを持って仕事をすると楽しいということを伝えたいと思っています。

一方で、1部の公務員の不祥事が起きて、ネガティブな印象を与えたりしたことがあり、国や地域を背負う公務員を卑下するような風潮があることは悲しいと思います。

—いろいろな業務を経験されたと思いますが、特に印象に残っている出来事とかあれば教えていただけますか。

入省して暫くして霞が関の行政改革が始まり、そこから私の行革と関わる公務員人生が始まりました。最初に官房で省全体の行革を担当してから、次に国鉄改革を担当しました。大きな仕事を、若い4年目の係長としてやらせてもらって嬉しかった。

立派な上司がいて、孤立無援になりながら信念を貫いて、仕事を達成しておられたのを目の当たりにして、すごく勉強になりました。以来、改革に携わり続けた38年間だったと思います。

—航空行政にも長く携わられたと、お聞きしたのですが。

航空行政が1番長かったです。運輸関係事業では、モータリゼーションが進んで鉄道や海運が伸び悩む中で、航空だけはどんどん伸びていた感があります。規制だらけの航空行政から規制緩和が進んで、民間企業に競争市場が開放されていって大きく発展した。ここでも行革の成果を目の当たりにしました。

—航空行政だと諸外国との交渉とか、学部時代に高坂先生のもとで勉強されていた国際政治の知識が生きてくるように思うのですが。

国際交渉そのものは、英語が得意な人が担当していましたが（笑）、対処方針を考える上では、国際政治で勉強した、相手の要求を深く考察しないといけないという教えが生きていたと思います。

国際政治は争いの歴史で、勝者から見た正義が歴史になるが負けた側にも正義がある。

世の中、誰かの正義が一方的に正しいということはなく、国際政治とか大きな話だけでなく、日常も同じだと思います。なんで向こうはそういうことを言うのかよく考えると、最後に落としどころみたいなのが見えてくる。

高坂先生も、政治には、日々の

人間関係と一緒のところがある、とおっしゃっていました。

―大使館にも赴任されていたとお聞きしましたが。

英語に自信がなく、英語圏以外で海外に行きたいって言いました。結果的にスペイン大使館ですごく楽しかった。

外国から日本を見るという経験は大事だと思います。欧米ではなく、伸びているアジアの国から見るともっといいのかもしれない。

楽しかったスペインでの勤務を終えて、日本に帰ってからが大変でした。阪神淡路大震災が発生して、災害対策を総括する部署の担当補佐として、毎日、明け方まで仕事して、一旦帰宅してからまた出勤する生活を、1月の発災から4月ごろまで、しばらく続けたのを覚えています。

―仕事をされていた中で、大切にしてきたことっていうのは何かありますでしょうか。

交渉の話と同じになりますが、対立するときは、お互いに折り合えるのは何かっていうことを常に考えてきたつもりです。

そんなうまい解決策ってなかなかないんですが、どこかに互いのメリットを見つけて、良い方向に道を切り開くしかないですね。

―それでも八方塞がりになるときもあると思うんですけど。

そういう時は、応急処置だけして、タイミングが来るのをじっと待つんですね。

状況を見極めてのタイミング感は大事な気がしますね。

Q：国際担当の審議官をされていたご経験があるというのを伺ったのですが。

安倍総理の外遊に1年間お供をしました。国連総会では、各国首脳が100人近く来ている中で、安倍さんと会いたいっていう首脳がいっぱいいました。日本のプレゼンスがこんなに高いんだということに感動しました。安倍総理とは、打ち合わせや食事の席もご一緒して、オーラがあって、人を惹きつける雰囲気があるのには、さすがと思いました。

―退官されて、民間人の立場から、行政を見るとまた違って見えることはありますか。

今、会社の顧問をしていて、経営の話は聞いていますが、民間企業のマインドがわかるようになったとは言えないと思います。ただ役所が外から見てどう見えているかは、前より客観的に見えるようになった気はします。役所の後輩からアドバイスを求められれば、民間人として意見を言いたいと思います。

―今年度から、教授として着任されて、講義をされてどうですか。

退官して民間人になってから改めて行政経験を整理しました。行政の実務では当然と思っていることでも、講義を聞いて実務の世界はなんでこんなことになっているんだ、と思うようなことがあったら、どんどん質問してきて欲しいです。

―授業科目について、簡単にご紹介いただけますでしょうか。

前期の「政治・行政改革と霞が関」と、後期の「国土交通行政のプロセス」が、政策決定の総論と、各論のような関係になっています。前期では、政治と官の関係が改革を経て、どう変わったか、例えば政党との調整の現場とか、その調整結果である政府提出法案が国会

でどう審議されるか、メディアがそれに対してどういう反応をするかとか、どの役所の仕事にも共通している話をやっています。

後期は、国土交通行政の個別の政策をとりあげて、改革による政策の変化やその決定のプロセスを具体的に説明していきます。例えば公共事業の予算の決め方、公共事業批判とそれへの対応や国民生活への影響などの話をしたいと思っています。

前期のCSのテーマは「地域公共交通」です。学生に地域を選んでもらって、私が紹介する地方運輸局の担当部長や課長を通じて、自治体とか、交通事業者の話を聞いてもらって、地域の公共交通を維持するにはどうしたらいいのかを考えるということ。

後期のCSは「観光」をテーマにします。これも同様に紹介する地方運輸局を通じて自治体、観光関係事業者から話を聞いてもらって、観光振興の方法やそれに伴う問題をそれぞれ深掘りしてほしいと考えています。

―講義の際、何か心がけていらっしゃることはありますか。

実務家教員として、実務の現場の話をするわけですが、雑談で終わらないようにということを気を付けています。現場の話をよく整理して、テーマに応じて体系だった話ができるように考えています。

資料を役所のホームページから参照したり、交通事業者の経理を財務諸表を分析して見てみたり、事業者への補助金を自治体の予算から見てみるなど、実態がわかる授業にしたいと思います。また、手軽に入手できる参考図書の紹介を心がけています。

―実務の場面では、理論だけでは物事が動かないと思います。どういうモチベーションをもってアカデミックな学問に向き合うべきでしょうか。

難しい質問ですね。

実務ではその都度の解決を図って理論から外れることもありますが、アカデミズムの体系化された理論や知識は重要です。

理論で作った制度が、現場ではこういう形で具現化されているということをできるだけわかりやすく紹介したりして、アカデミズムと実務をつなぐ講義ができるように意識はしています。雑談とか裏話にも理論に通じるものがあるといい。

―公共政策大学院生向けにアドバイスをお願いします。

素晴らしい環境にいると思うので、存分に納得いくように勉強をしてください。たくさん本を読んで、世の中の物事に具体的に当てはめて考えてほしい。

また、大学という社会と上手くつきあってほしい。人間1人では生きていけないから、相談事があれば、1人で抱え込まずに自分に合う人を上手く頼って、相協力して有意義に過ごしてください。私もどこまでアドバイスできるか分かりませんが、人生経験だけはありますからね。

（インタビュアー・西田直矢・西森直生）

武藤 浩
むとう ひろし

１９７９年４月に運輸省（現：国土交通省）へ入省し、特に航空行政に長く携わる。また、在スペイン日本大使館への赴任経験や、国際担当審議官として安倍政権における首脳外交に同行した経験も持つ。２０１６年６月から約１年間、国土交通省事務次官を務める。２０２０年４月から京都大学法学研究科客員教授、２０２３年４月から現職。